

国立国語研究所学術情報リポジトリ

久米島・島ことば調査のつどい

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002455

久米島・島ことば調査のつどい

久米島・島ことば調査のつどい

(司会：木部) 皆さん、こんばんは。今日はお忙しいところ、こんなにたくさんおいでくださりましてどうもありがとうございました。私どもは国立国語研究所というところから、久米島の言葉を調べにまいりました。おとといと昨日と4つの集落の方にお話を伺いました。おとといは比嘉と儀間の方にお世話になりました。ありがとうございました。昨日は真謝の方と西銘の方にお世話になりました。本当にありがとうございました。

この方言の記録は、国立国語研究所のプロジェクトとしては今年で4年目になります。1年目は奄美の喜界島というところに行きました。2年目は沖縄の宮古島にまいりました。3年目は東京都の八丈島と奄美の与論島と沖永良部島にまいりました。今年が4年目で、場所としては6カ所目になり、久米島の皆さんにお世話になることになりました。もうご存じだと思いますけれども、今申し上げた地域は、ユネスコが2009年に消滅の危機にひんしているという言語を発表した、その中に含まれている地域です。

いろいろな社会的な事情があって、今、各地の方言がなくなりつつあります。方言が子供たちに伝承されなくなっています。今でも60歳以上くらいの方は、まだおそらく方言を話そうと思えば話せる方々が多いと思うんですね。それで、今、この方言をまず録音しておくことを私たちは第一に考えています。

久米島にも立派な方言辞典があると伺っております。拝見しました。とても立派な、とても素晴らしい仕事だと思います。私たちはできればそれに声を録音して、アクセントやイントネーションまで記録しておきたいという気持ちで、録音をしております。今日来てくださった方にも録音してよろしいですかとお伺いしたのはそういう事情です。

今日は私たちが学習したこと、あるいはそれ以前からこの久米島に縁があってここの調査をしているメンバーが勉強の発表会をしますので、その後で、そこは違うとか、こういうこともあるよというのを、ぜひどんどん教えていただけるとありがたいと思うんです。

最初に3人続けて発表をいたします。その後、全体についてディスカッションしたいと思いますので、そのときにぜひ質問といいますか、いや、こうじゃないよ、こうだよということをお伺いできれば、私たちももっといい仕事が、勉強ができると思いますので、ぜひ最後までご意見を伺えますように、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは最初の発表は「久米島方言について」という題で、琉球大学非常勤講師の仲原穰さん、お願ひします。

1 「久米島方言について」 仲原穰

(仲原) 皆さんこんばんは。よろしくお願ひします。

私は真謝の11番地というところで生まれまして、生まれてすぐに、2歳くらいまでに本島に引っ越したので久米島で育つことができなかったんですが、ずっと久米島の言葉に興味を持って、17～18年久米島の調査をしています。

これまでに勉強したことを中心に皆さんにご紹介しようと思ひまして、今回この短いペーパー

を作りました。こちらは帰ってから見ていただいて構いません。今日はスライドを用意しましたので、そのスライドを使ってご説明したいと思います。

まず、先ほども木部先生から今回のこのプロジェクトについての報告がございましたが、軽く紹介させていただくスライドです。世界各地からこの久米島の記録のために一線の研究者の方々が集まってくださり、また、非常にありがたいことに皆さんの協力を得まして、おかげでよい資料が4カ所取れたかなと思います。ありがとうございます。

その4カ所はこの4カ所です。1日目が比嘉と儀間、2日目が真謝と西銘の4カ所です。今回の調査の内容を何とか盛り込もうと画策していろいろやってきたんですが、今回私が準備したこととどうもうまくつながらなかったの、今回は国語研究所の調べたデータをお見せすることができません。それで、私がこれまで調べてきたものを中心に、久米島方言について考えていることとお話しさせていただくことにさせていただきます。よろしくお願いします。

久米島の概況

最初に「久米島の概況」と書きました。皆さんにとっては当然のことですが、後ろに立っている先生方は久米島のことを知らない方もいますから、少しでも久米島の概況について説明します。面積が63.21キロ平方メートルです。そして集落は32集落、奥武が今は集落がありませんから、33から32に今は減っております。イーフは最近増えた集落ですね。

人口は平成25年3月現在で8,353人、10年前と比べると、65歳以上はほとんど同じ人数なんですが、64歳以下が何と1,000人も減っています。つまり若い世代がだいぶ減っているということですね。

それから集落についてですが、後でも触れますけれども、銭田と真我里とか、北原、大原なんというところは比較的古くから那覇などから入ってきた集落です。それから糸満の漁民の真泊の集落とか、オーハ島。これらは渡名喜などからの移住だと聞いていますが、間違っていたら教えてください。それから鳥島は奄美の硫黄島からの移住ですね。

次に、「久米島の言葉の位置」ということですが、プリントをご覧くださいと、1ページ目の真ん中あたりに、久米島の言葉には、こんな言葉がありますよというのが書いてあります。「沖縄系」とあるのは、久米島方言のグループと、その他の地域の沖縄語の影響を受けているものの2つです。沖縄方言系は、先ほど言った移住集落がそこに入ります。そして「その他」というところのオーハ島も、ここは首里、那覇ではないけれども、周辺の離島からの移住ということで書いてあります。それから国頭語系ですね。国頭語系というのは鳥島ということですね。

ここで言う沖縄語とか国頭語というものですが、沖縄語というのは北琉球諸語の中の1つです。北琉球諸語には奄美、国頭、沖縄があります。これは文章でプリントには書いてありますので、後で帰ってからお読みいただければ分かると思います。久米島方言はその中の沖縄語というやつに入っているんですが、沖縄語と国頭語というのが沖縄本島の中にある言葉です。沖縄本島の北部地域が国頭語と呼ばれています。これはユネスコの2009年の名付けによるものです。沖縄中南部の方言が沖縄語で、沖縄北部方言が国頭語ということですね。金武町よりも北、それから奄美諸島の南の方の与論と沖永良部も国頭語の中に入っております。鳥島方言はこの国頭語の傾向があるということですね。それから沖縄語系統のものが残りの集落ということですね。

先ほど言ったように沖縄本島には沖縄語と国頭語の2つのグループがあって、沖縄中南部に近い言葉ということで周辺の離島が沖縄語に入っております。その中の1つが久米島方言とっていただければと思います。

今回、地図にした集落ですが、2010年あるいは2011年までの調査で得られた地点です。今回、

21 地点を地図化してあります。今回の資料を全部しゃべると 50 分か 1 時間かかってしまいます。そうすると皆さんの楽しみにしている残り 2 人の方々のお話が聴けなくなってしまうので、「2. 沖縄語との共通性」というところは、今回は簡単にプリントで読み進めたいと思います。



図1 久米島言語地図 調査地点

沖縄語との共通性

1 ページ目の真ん中にあります「2. 沖縄語との共通性」というところですが、ここでは那覇方言と久米島方言の 2 つの方言、真謝方言と嘉手苺方言を比較して例に挙げております。

まず沖縄本島中南部と似たところは、エ段がイ段になったり、オ段がウ段になったりするということですね。「雨」が「アミ」になったり、「横」が「ユク」になったりする。

それから (2) の共通語の「ス・ズ・ツ」に当たるものは、「シ・ジ・チ」になまっている。これも中南部の言葉と一緒にですね。「臼」が「ウシ」, 「綱」が「チナ」, 「水」が「ミジ」のように、「ス」と「ズ」と「ツ」は「シ」と「ジ」と「チ」になまっております。

それから 3 番の「アイ」とか「アエ」は「エー」に、長い母音になまります。「アウ・アオ」も「オー」になっておりますね。「野菜」が「ヤセー」とか、「前」が「メー」、これも本島と似た特徴です。

次の 2 ページ目の (4) ですが、「キ」が「チ」になる、「ギ」が「ジ」になる。これも沖縄本島と同じですね。それからチャ行とかジャ行に変化する例が多いのもこの特徴です。例えば「肝」が「チム」になったり、「先」が「サチ」というふうになる。また、額が「ヒチェー」、左が「ヒジャイ」のようになる。これも沖縄本島と似た特徴です。

(5) の「awa が aa になる」というところですが、「kawa」という連続が「カー」のように w が抜けちゃうということですね。それで、俵が「ターラ」、川原が「カーラ」となるような具合です。

(6) 語中の「リ」が「イ」になる。これは、雷が「カンナイ」になったり、ほこりが「フクイ」になったりする例です。

(7) のハ行は「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」。「パ・ピ・プ・ペ・ポ」でも、「ファ・フィ・フ・フェ・フォ」でもないという意味です。鼻が「ハナ」、刃物の「刃」が「ハー」。何でこんなことを書くんだと思っていらっしゃる方もいるかもしれませんが、沖縄本島北部方言では、鼻を「パナ」と言うところがありますね。つまり「パ・ピ・プ・ペ・ポ」のところがあるんですが、久米島は「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」の方言だということです。

それから (8) のダ行がラ行になる傾向がある。例えば特に嘉手苺の下の例を見ていただきたいんですが、毒が「ルク」とか、筆が「フリ」とか、道具は「ローグ」というふうになる例です。ただし単語によっては、真謝のように、ならない単語も出てきます。これに関しては、人によって、話者によって、ダ行を保持する人と保持してない人がいるという特徴も実はあったりするの

で、もうちょっと調査が必要かなと思っていますが、とにかく久米島はダ行がラ行になる傾向が強いかもしれません。

(9)の動詞の言い切りの形の「ン」。例えば真謝なんかでは、「下りる」が「ウリユン」、「褒める」が「フミユン」、「する」が「スン」ですが、嘉手苅方言など久米島西部方言の地域、今回我々が調査させていただいたところでいうと、儀間方言や西銘方言でも言い切りの形の「ン」が抜ける傾向があります。例えば嘉手苅方言では「下りる」が「ウリー」、「褒める」が「フミーン」、「する」は「ス」のように、「下りる」や「する」は「ン」が抜けています。しかし単語によっては抜けなかったりするんですね。何らかの要因で「ン」が抜けるんですけども、抜けない語形というのも聞かれる。じゃあ、これがなぜ抜けないのか。ここに関しては、まだ調査不足で材料を持ってないので、これが分かったらまた皆さんにご報告したいと思っています。

次の(10)ですが、形容詞の語尾は「サン」か「ハン」ということですね。例えば真謝方言で、「甘い」を「アマハン」、「悔しい」は「クチサン」と言いますが、嘉手苅方言では「アマハ」、「クチサン」のように、「アマハン」と言わずに「アマハ」と言い切ったりする。その意味では、動詞と同じように語尾の「ン」が省略される傾向があります。

ここまでのまとめを簡単にしてみると、ハ行がパ行で発音されないことや、ダ行がラ行化する現象を見てみると分かるように、久米島方言は首里方言よりも那覇方言に近い特徴を持っていると言えます。首里方言ではこのような現象は起きていません。ただし真謝方言には嘉手苅方言と異なる現象がわずかに見られます。これはところどころですね。

なお、ダ行のラ行音化は嘉手苅方言に顕著であり、方言によってダ行もラ行も使用されています。ちなみに真謝方言のダ行音は、元のダ行を保っているのではなく、例えば共通語などの再獲得、あるいは首里方言などの影響も考えられるかと思います。

その次の3ページの上ですが、「ウン」とか「アン」がくっついて動詞とか形容詞を作っているという点においては那覇方言と共通ですが、細かい部分では、以下に述べるように久米島方言特有のものがああります。これは次に細かく見ていきたいと思っています。これから先、久米島方言の独特の特徴という話については、スライドにしてあります。前を注目してください。

久米島方言の独特の特徴

のどを詰める音ですけれども、首里方言では、「お前」と言うときは「ッヤー」のように、のどを詰める音があります。「家」は「ヤー」、「お前」は「ッヤー」です。こののどを詰める音によって意味を区別しているんですね。だから「ッヤーヤ」と言うのと「お前は」、「ヤーヤ」と言うのと「家は」という区別があるんです。

しかし、久米島方言ではこの区別がない。どっちも「ヤー」、「あなた」は「ヤルー」、「ヤール」とかいろいろあると思うんですが、目下には「ヤー」ですよ。「家」も「ヤー」。つまりのどを詰めることによって「お前」と「家」を区別するということはしてない。文脈や場面によって区別をしている。

これを地図化するとこんな感じです。区別があるところは銭田、真我里。つまり銭田、真我里の人たちはこの区別がある可能性があるということですね。「上」のことも多くの地域では「ウィー」というところ、銭田とか真我里は「ツイー」のように、のどを詰めているんです。

それから「サン」とか「ハン」という話をしました。例えば本島の中心的な方言の1つ「サン」を書いておきましたが、「ひもじい」は「ヤーサン」と言うところが多いんですが、久米島では「ヤーハン」となる地域があります。「泥棒」のことを「ヌスブ」と言う地域があるんですが、真謝方言では「ヌフル」と言いますね。

これから先、スライドを何枚かお見せしますが、単語によってこのサ行がハ行になる度合いが違います。「サン」が「ハン」になる地域は北東部とか東部にあります。終助詞の「サ」が「ハ」になる地域は久米島全域、それから「ムスブ」(盗人)が「ヌフル」になる、「ナスン」(産む)が「ナフン」になる地域は、真謝、宇根、泊、謝名堂という地域に限定されているわけですね。つまり単語によって「サン」が「ハン」になるという地域が非常に異なるわけです。

地図で見た方が分かりやすいです。久米島の北東部、このあたりでは、甘いを「アマハン」と言う地域。しかしこの青く塗っている地域は「アマサン」と言う地域。つまり久米島の中でもこんなふうに「ハン」と言う地域と「サン」と言う地域が違っているということです。これについて地図化したのがほかにも何枚かあります。この線の説明をしておきます。

これは間違えて髪の毛を置いたわけじゃありません。例えば「ハン」の地域、「サン」の地域というふうに、言葉の特徴の区別がある地域を分ける線ですね。これを等語線と呼びます。地図に線が出てきたら等語線と思ってください。似たような特徴をする地域ということで線を引いています。例えば「広い」を「ヒルハン」と言う地域はこの地域。何と先ほどは全然仲間に加わらなかった山城が仲間になっちゃった。「ヒルサン」と言う地域が青の地域。ということで、等語線も単語ごとにはばらつきがあるというわけです。

最もばらつきが少ないのが、「ヒーサン」(寒い)。ちょうど今の時期、今日は暖かかったですが、「ヒーサン」と言う地域が多いんですが、上阿嘉と比屋定は「ヒーハン」と言うんですね。「ヒーサン」が多いですよ。でも「ヒーハン」と言うんですね。この地域の人たちは、より「ハン」が好きなんです。

今度は「泥棒」のことを「ヌフル」と言う地域です(第3章 図7参照)。これも「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」になまっています。「ヌスル」と言う地域と比べると、「ヌフル」になっている地域がある。この地域もまたこうやって限られてきて、さっき上阿嘉は変化していたのに、ここは変化しない。こういうことですね。

そして「舌」が面白いですね(第3章 図4参照)。「シバ」と言う地域と「スバ」と言う地域。北の方の2集落では「チャンパー」と言います。「べろ」のことを「チャンパー」。「チャンパー」と言う人、いない? いますか。あ、いますね。「チャンパー」の地域がありますね。「べろ」のことを「チャンパー」と言ったりします。ただし両語形があるので、「スバ」とも言うし、「チャンパー」とも言うらしいんですが、「シバ」とも言うし、「チャンパー」とも言う。「シバ」と言うところと「スバ」と言うところはこんなふうに違って、さっきまで仲間じゃなかった島尻、比嘉、謝名堂まで仲間に入ってきます。

「行くよー」とか言うときに、「イチユサ」と言うか、「イチユハ」と言うかによって地図を作ってみました。「イチユハ」と言う地域は、今度は北の方が多くなっていて、南の方が「イチユサ」を多く使うというふうに分かれちゃうんですね。このようにサ行がハ行になる現象は、単語ごととか、いろいろな言語事象ごとに分かれているということが分かると思います。ちなみに「ナスン」、「産む」を「ナフン」と言う地域はこんな感じですね。今度は山城が入ってくるわけです。北の方は、この「ナスン」は「ナスン」のままですね。

ですから、北の地域は北の地域とか、西の地域は西の地域とか、東は東、南は南、みたいなまとまりがあると地域間の交流だけで説明できるんですけど、実は地域間の交流以外のところで何らかの影響があるかもしれないわけです。

もう1つ面白い現象で、「する」という動詞は「スン」で、ス系統を使うんですが、さっきも紹介したように、嘉手苺方言では「スン」と言わずに「スー」とか「スッ」と言ったりします。「し

ない」は「ハッ」と言ったり「ハー」と伸ばしたりします。要するに「ハン」とか「サン」とか「スン」と言わないんですね。こういう現象は嘉手苅，大田，西銘，仲地，山里などにあると思われます。それを地図化したのがこの地図ですね（第3章 図11参照）。しないを「ハン」と言うところ，あるいは「ハ」と言うところがあるんですが，ちょうど「ハ」となるところがこのあたり，嘉手苅から山里のあたりまでですね。「サン」が「サッ」となる，要するに語尾の「ン」が抜けている地域ですね。

それから島を右と左，東と西に大きく分ける地図もできます。例えば「冬瓜」のことを「ツブイ」と言うか，「シブイ」と言うか（第3章 図3参照）。「ツブイ」と言う地域はこの地域。ここは銭田，真我里なので気にしないでいいと思うんです。那覇方言系ですからね。ちなみに「シュブイ」と言うところもちょっとあるんですね。こういうふうには，ぱかっと分かります。

同じような分かれ方をするのが，昨日のことを「キヌー」と言うか，「チヌー」と言うかという地図ですね。これはさっきの地図でいうと，ここが違います。ちょうど仲地とかこのあたりでしょう。だいぶ変わってきていますよ。

もっと複雑になる地図をお見せしようと思って作ったのが，この「唾（つば）」ですね（第3章 図12参照）。「唾」は「トゥPPER」，「トゥンパー」と言うところと「トゥンパイ」と言うところと「トゥンペー」と言うところと「トゥッパイ」というふうには，「トゥ」から始まる地域が赤で塗ってあるところ，それに対して「ツPPER」と言うのが1カ所だけ出てきていますね。「トゥ」から始まるところで「トゥヘー」と言うところもありますね。「トゥ」から始まるところと「ツ」から始まるところを地図では片仮名系と平仮名系というふうに分けているんですが，このように似た語形が似た地域に隣接していると，「つばを何て言うの」と聞けば，だいたい住んでいる地域がばれちゃう。「チンペイ」と言う地域が青の地域ですから，「チンペイ」と言う人たちはここだとすぐ分かるんですね。「トゥ〜」と言う地域は，こんなふうにはいろいろなバリエーションがあるわけですね。

「鎌」（第3章 図3参照）。道具になると，またさらに人々の交流がよく分かります。道具というのは人から人へと伝わっていくものなので，人々の交流がよく分かる地図になるんですけども，このように「イレラ」と言う地域が東側に非常に多くありますが，儀間と嘉手苅は「イレナ」，それからここは大田とかですかね，「イリナ」。それから「イラナ」という，沖縄本島と同じ形を使う仲泊とかあの辺です。それから「エレナ」。これは昨日，西銘でも「エレナ」とおっしゃっていました。一部，「エレラ」と言う地域が，ここは具志川ですかね。具志川か仲村渠の辺です。

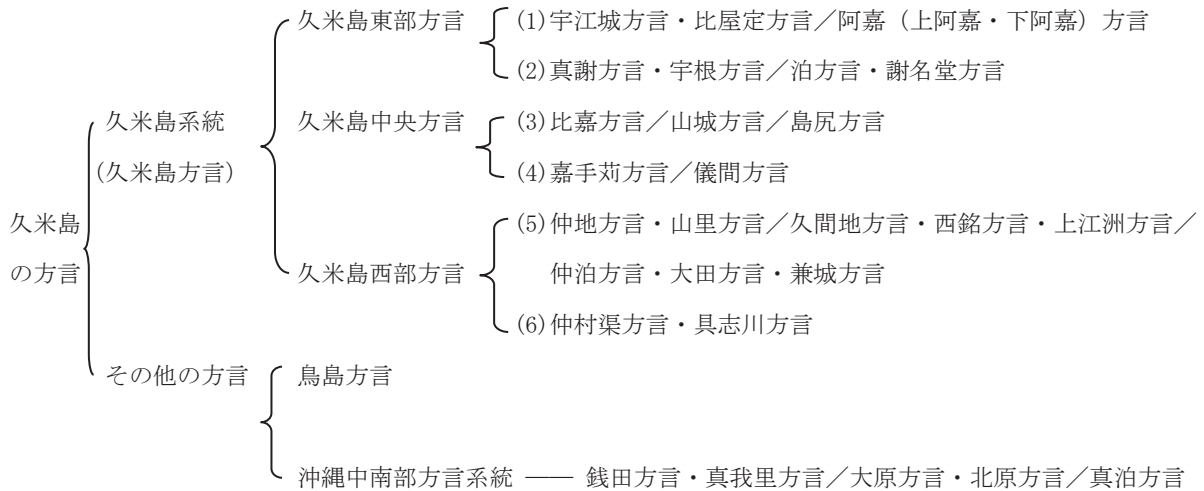
ということで，たくさん線を引いたんですが，この今までお見せした線を全部1枚の地図に落とし込むと，こんな線ができます。これも皆さんの資料の中に入れてあります。これを単純化すると，こんなふうには線が引けるのではないかということです。つまり1番から6番までの地域に分類できるんじゃないか，久米島方言はこんなふうには下位分類できないでしょうかという提案ですね。

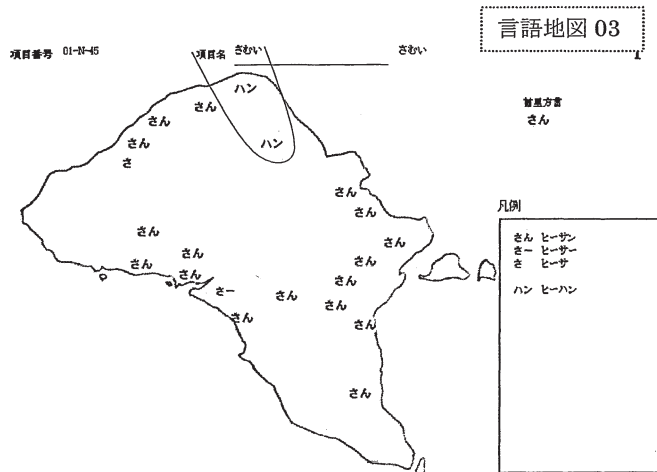
例えばこの1番の地域。ここから先はちょっとまゆつばで聞いてください。(1) 宇江城（ウエグスク），城（グスク）がある地域，その城下町。宇江城とか，比屋定とか，上阿嘉まで。(2) それから登部那覇（トンナハ）城がある宇根とか真謝，それからその隣にある泊，謝名堂，(3) 比嘉，山城まで，あるいは島尻までの地域。(4) それから伊敷索城（イシキナワグスク）がある，ちょうど今のこの場所ですが，儀間と嘉手苅。(5) それから港のある兼城，大田，仲泊，西銘。西銘は中心地ですからね。その港をがっちり押さえている。(6) それから具志川城のある，仲

地から仲村渠までの地域のあたりというのが結構近しいのかなと思います。

あとは北原とか大原は調べていませんから地図化していませんし、真泊も地図化していませんが、こういったものはその他という感じに分類できないかなということで、こういうふうの下位分類を考えてみたわけです。

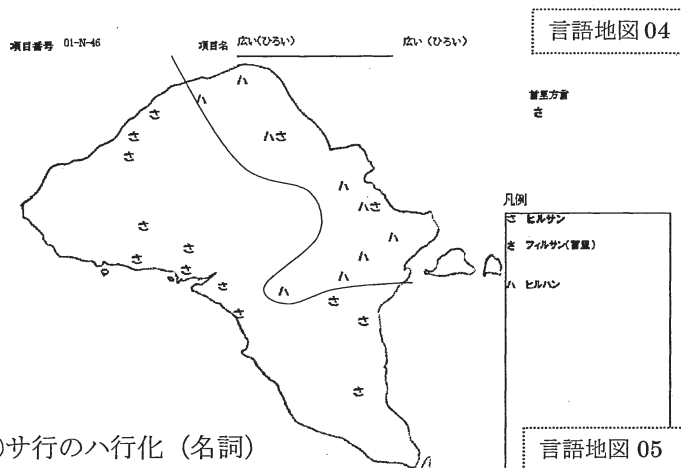
ということで、久米島方言の特徴と、それからどんな方言と近いのが久米島方言だという話、それから久米島方言を下位分類してみるとこんなふうになるんじゃないですかという提案までさせていただいて、今日の話をお閉じしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)



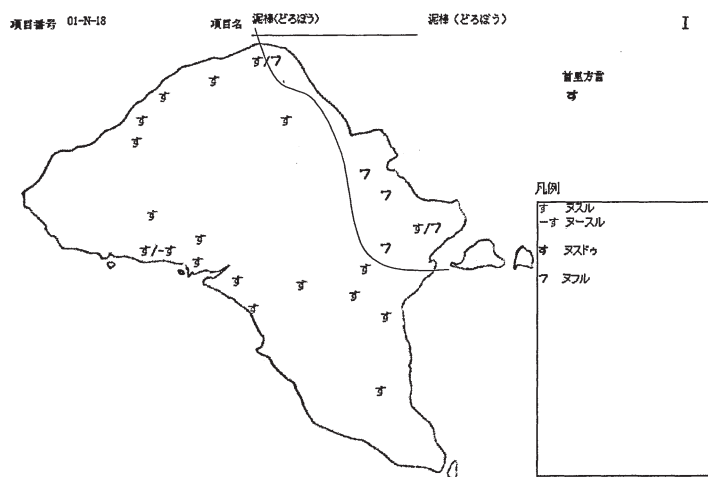


●「寒い」の言語地図

③サ行のハ行化が進んだ語例（形容詞語幹末尾「広い」）



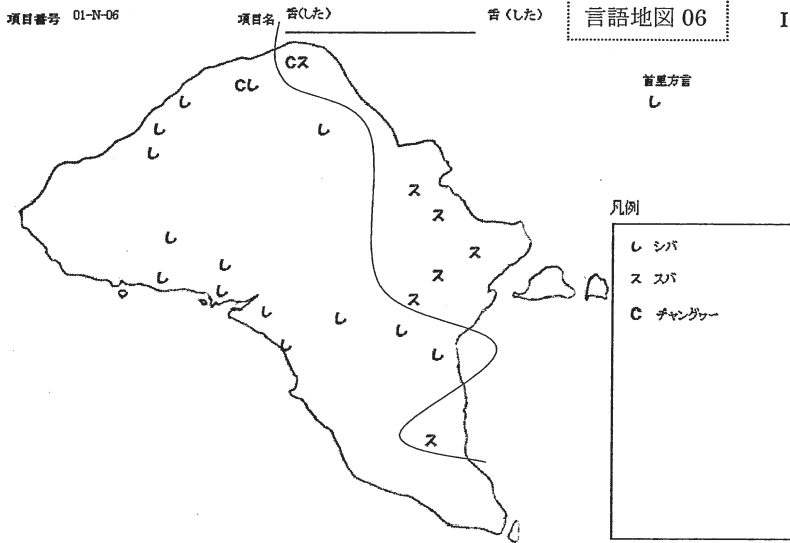
④サ行のハ行化（名詞）



●「泥棒(めすど)」の言語地図

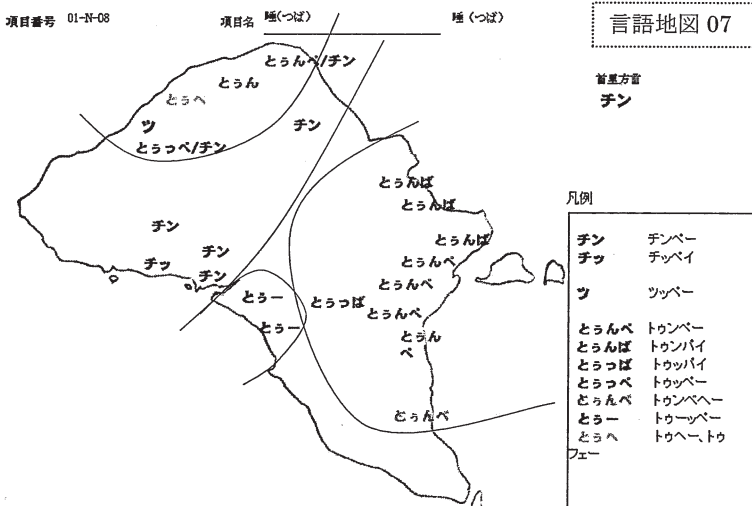
4.2 語彙的な違いによる言語区分

儀間と嘉手苺は隣り合わせの集落で、ジマ・カティカルなどと併称される集落です。真謝も隣の宇根とウチャム・マージャのうようにセットで呼ばれています。隣の集落との方言差で気になるのが、単語ごとの「差」です。ここでは、久米島のなかでも言語差がみられた言語地図を3枚挙げます。



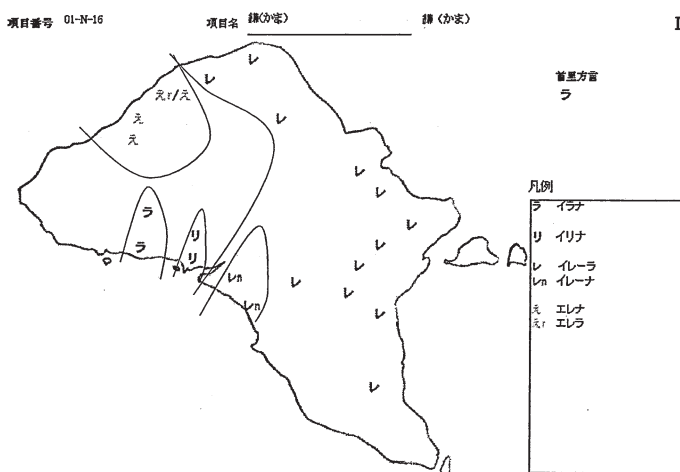
沖縄本島方言などで「シ」で発音される「シブイ（冬瓜）」が久米島では「シブイ」や「スブイ」で発音されます。その場合も、上に示した「舌」と同じく、久米島の西部では首里方言と同じ「シ～」になり、東部では「ス～」になります。なお、宇江城や比屋定で用いられている「チャングラー」は他の方言では聞くことができませんでした。この地域の人々の結び付きの強さを示す単語の一つでしょう。

●「舌」の言語地図



久米島方言のなかで、多くの語形を持つ単語の一つが「唾」です。真謝を含む久米島東部と北部地域では、語頭が「トウ」になる語形（トウンパイ、トウンペーなど）が多くみられます。儀間と嘉手苅は「トローッペパー」という語形、久米島西部は「チンパー」を使っています。

●「唾(つば)」の言語地図



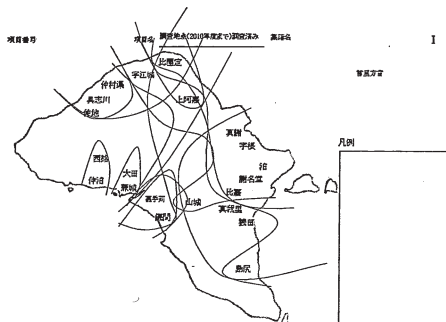
言語地図 08

最後に挙げたのは、生活必需品の「鎌」を示す地図です。自分で作ることでできない道具は、人から人へと受け渡され（買い求める、譲り渡すなど）、「もの」と「ことば」が一緒に伝わる可能性が高い単語の一つです。沖縄本島のやんばる方言や、西原方言でもそうですが、集落の結び付きがよくわかることがあります。上の地図の「イレーラ」は久米島の多くの集落で用いられています。それに比べて「イレーナ」は儀間・嘉手苅、「イリナ」は兼城・大田、「イラナ」は仲泊・西銘、「エレナ」や「エレラ」は仲地・具志川・仲村渠と、隣り合う集落で同じ語形を使っています。

●「鎌」の言語地図

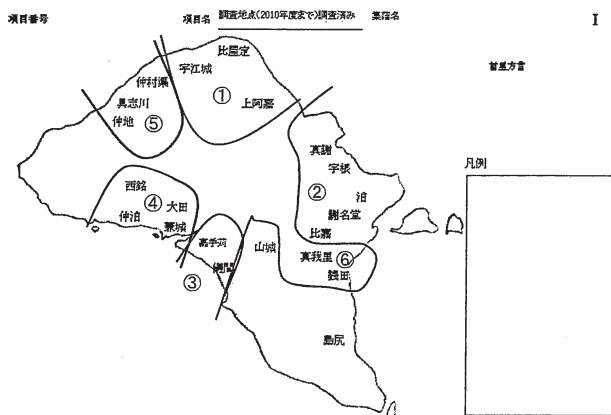
5. 等語線が示すものとは（まとめ）

これまで示した8枚の言語地図は久米島方言の特徴を示す重要な地図です。この8枚の言語地図に記した等語線を一枚の地図に重ねたものが以下の地図です。線が多く重なっている部分ほど隣の集落との「言語差」があることを示しています（※ただし、2011年までの調査結果のみ）。



左の地図の等語線の重なり具合により、久米島方言は①北側、②東側、③南側、④西側、⑤北西部、⑥その他、全部で六つのグループに分類できます。シンプルに線を引き直すと以下のようになります。

久米島方言の下位区分(等語線)



- ①北側（宇江城・比屋定・上阿嘉）
 - ②東側（真謝・宇根・泊・謝名堂・比嘉・島尻・山城）
 - ③南側（儀間・嘉手苅）
 - ④西側（西銘・大田・兼城・仲泊）
 - ⑤北西部（仲村渠・具志川・仲地）
 - ⑥ その他（錢田・真我里）
- ① 北側と②東側は旧仲里村にゆかりのある

地域です。また、④西側と⑤北西部は旧具志川村にゆかりのある地域です。やはり、間切時代から続く村（市町村）の区分は、言語にも大きな影響を与えています。特に比屋定と仲村渠との距離はやや離れており、人々の行動範囲にも影響を与えていたとも考えられます。このように、地理との関係も忘れてはならない情報です。ただし、単語によっては仲村渠や具志川が宇江城や比屋定と同じ特徴をもつものもあり、この区分も絶対ではありません。また、南の区分にも注意しなくてはなりません。嘉手苅と隣接する儀間は似た部分もあり、村落の分け目できれいに別れるわけではありません。人々の往来は集落内、となり通しの集落、村内の交流や小中学校の交流、高等学校の交流などさまざまです。

③のうち、嘉手苅は具志川間切の山城と交換された1744年までは仲里間切でした。沖縄本島中南部方言と北部方言との境界線に、読谷山間切と金武間切が関わっていたことは『名護市史 言語編』などに詳しく説明されていますが、この仲里間切と具志川間切の場合も、間切の境界線が言語の区分になる例の一つといえます。

また、さらに時代を遡って14-16世紀のグスク時代の久米島を重ねて考えてみると、①は中城城、②はトンナハ城、③はチナハ城、⑤が具志川城に比較的近い集落です。④は間切時代以降、具志川の中心地になりましたが、地理的にはやや傾斜地になっており、地形との関わりも関与しているかもしれません。

ただし、久米島の集落の多くは、もともとあったシマ（マキョ・クダ）から移動して現在の集落を形成しているため、今後は民俗学や歴史学などの成果などに学び、よりきめ細やかな分析が必要です。これについては今後の課題したいと思います。

2 「久米島のことばを語り継ぐこと」 當山奈那

(司会：木部) はい。どうもありがとうございました。それでは2番目の発表です。「久米島のことばを語り継ぐこと」という題で、琉球大学大学院博士後期課程の當山奈那さんをお願いします。

(當山) 初めまして。琉球大学の當山奈那と申します。那覇から来ました。よろしく申し上げます。今日は「久米島のことばを語り継ぐこと」というタイトルで、主に久米島紬の方言に見られる久米島の言葉の世界というものを見ていきたいと思います。

私は5~6年前に琉大生みんなで久米島に方言調査をしに来たことがあります。そのときに私の2つ上の先輩、宮平飛鳥さんという方が久米島紬に関する調査をして、「久米島紬と方言」という卒業論文を書いています。これは、真謝を中心に、比屋定、宇江城で聞き取り調査を行って、久米島紬の作業工程、道具にかかわる語彙、および関連する民俗語彙を収集、記述したものです。具体的には、作業工程や、ムスングワー（織締め緋）の技法、久米島紬の模様など、さまざまな観点から久米島紬に関わる方言語彙の細かな記述を行っています。

この卒業論文は何年か前に本にして久米島役場の方に送ったので、もしかしたらどこかで見られるかもしれません。どこにあるのかちょっと分からないのですが、お送りしたのでどこかにあると思います。ぜひご覧ください。

今日はこの先輩の論文から、久米島紬の方言語彙、そのうちの植物、動物、道具にかかわる語彙を取り上げて、久米島の文化と言葉の多様性とはどういうものかということについて具体的に考えてみたいと思います。

言葉とはその土地の人間のアイデンティティーであるということ私達は直感的に知っていますが、それがどういうことかということ具体的に示す必要があるかと思います。私は今日、言葉というものが人間の暮らしにどのように密接にかかわっているのかということ、この「久米島紬と方言」の論文を使わせてもらって、具体的な形で示してみたいと思います。

これですけど、クレー ヌーチャンチョービーガ（これは なんというのでしょうか？）。これは久米島の多くの方言では「ムシグワー（蚕）」と言います。かわいいですね。このムシグワーにかかわる語彙ですけど、先輩の論文では300語彙くらい収集されています。こちらに映っている画像の文字は小さくて見えにくいと思いますが、例えばムシグワー自体を指す語彙には、ムシグワーとかウルジムシ（養蚕）があります。春に行う養蚕のことをウルジムシと言ったり、あるいはタネムシのことをサニムシと言います。また、養蚕に用いられる植物や、養蚕に用いられる道具、あとはムシグワー ニンジュン（蚕が眠っている）とか、ムシグワー チカネーン（養蚕する）とか、ムシグワー フルイユン（蚕が育つ）のように、作業工程に合わせていろいろな言い方、表現がたくさんあります。論文から抜き出してここにあげてみました。

そもそも、私の那覇の方言では、カイコのことばは「カイグ」とか「イトウムシ」と言います。ですから、これを「ムシ（虫）」と表現するというのがとても面白いなと私は思っています。しかも、カイコの名前について、このようにたくさんの単語や表現の仕方がある地域は、私は沖縄島の中で結構いろいろな方言を調査させてもらっているのですが、これまで見たことがなかったので、すごく驚きました。久米島紬というものを通じて、カイコが久米島の人にとってとても身近で大切な存在だということが、このムシグワーという名前、愛称や表現の豊かさから伺い知ることができるのではないかなと思っています。

では、次は民具です。久米島紬の製作工程で、民具のミスガーミ（味噌がめ）を使うというものがありません。そういえば、「ミス（味噌）」といったら久米島は味噌づくりが盛んですよね。私も久米島のみそクッキーがすごく好きです、那覇でも売られているのでよく買うのですけれども。今は使用しているか分からないのですけれど、このミスガーミを久米島では紬の作業工程で使用していたそうですね。どういう作業で使用したかという、繭を広げて真綿にする工程で用いられたということです。

ミスガーミの縁を利用して、広げた繭をいくつか重ねて袋状の形に引き伸ばしました。さらにこのミスガーミを利用して作った袋状の真綿を、特に「チュボマヌ（壺真綿）」、つぼの真綿と呼んでいるそうです。真綿を袋状に引き伸ばすという製法はすごく古い方法だというふうに先輩の論文では指摘されていました。

暮らしの中では身近にあるミスガーミを久米島紬の工程で用いているというところがすごく面白いと思うと同時に、なぜミスガーミの口を使う必要があったかということにはちょっと不思議です。ミスガーミの形から考えると、湿気を防いだり、何か味噌にとって悪い菌とかが入らないように、この口が小さいということが重要だったと思います。ミスガーミに酒を入れたらサケガーミ（酒がめ）になってしまうのですけれど。この口が小さいというミスガーミの特徴が、チュボマヌを作るのに適していたのかなと思いました。でも、よく分からないので、皆さんに教えてほしいです。

次は植物ですね。これはヤブツバキ、「カタシ（ヤブツバキ）」と言うとのこと。これが久米島紬を作る過程でどのように使われるかという、実から油を絞ったものをカタシヌ アンダ（ツバキの油）と言って、ウムカシ（芋かす）と混ぜて久米島紬ののり付けの作業に用いたということです。

このカタシはもちろん久米島紬だけに用いたわけではなくて、カタシヌ アンダ（ツバキの油）は、料理や髪を洗うのにも用いられたとありました。さらにそれだけじゃないのです。あと1つ、ササ（魚毒）としての利用があります。これは油を取った後のカタシのかすを陰干しして乾燥させてから使います。これを袋に入れて、海水なのか、潮だまりなのかちょっとよく分からなかったのですけれど、その中で袋を振ると、魚が気絶しているのか、死んでいるのか、とにかく魚が浮いてくるのでそれを捕まえたらしいです。

私はこれを聞いて、また面白いなと思ったところがあります。沖縄におけるササの方言語彙はすごくバリエーションがあるのですよ。植物をササ、すなわち魚毒として利用することと、ササというこの語形自体は、沖縄島の多くの集落でも共通して現れています。でもどの植物のどの部位をササとして利用するかは集落によってかなり違います。バリエーションが豊富なのです。

例えば、私がいる那覇ではキリンソウの茎から出てくる液、読谷村の長浜ではサガリバナの葉、国頭村の奥ではイジュの木の花の皮、恩納村の恩納ではルリハコベ、名護市の汀間ではヤエムグラの草と伺っています。こんなに違いがあるのですね。

これがどういうことかというのをちょっと考えてみたのですけれど、こういうササという1つのものを取り上げて、その利用、どの植物のどの部位をどのようにどこで利用するのかという在り方を見たときに、沖縄の中でもかなりのバリエーションがあることが分かります。こういうことは、沖縄において生物と人間とのかかわり方の多様性が反映されているとても分かりやすい例だと言えます。

ちなみに、ここで、私が言う多様性というのは、ササのように、何か1つを取り上げて、たくさんの地点から観察してみたときに、広い地域でバリエーション豊かな、全部違うというような

バリエーションがあるという意味です。さっきの仲原穰先生の「唾」の方言のバリエーションと同じです。久米島の中でも「唾」の方言に地域ごとのバリエーションがあるように、ササを使う植物、それから利用の仕方に関しても、久米島や沖縄、あるいは、広い地域でたくさんのバリエーションがあるというすごく面白いことが見えてきました。

あと、不思議に思った研究者の方々がいるかなと思ってちょっと作ってみたのですが、なぜ植物を使うと、魚が浮いてくるのかということです。私もちょっと不思議に思って、話者の方たちからお話を伺ってみました。そうすると、「酔わせる」とか、「しびれさせる」とか、「このイジュの粉がえらに掛かって魚が呼吸できなくなって浮いてくるのだ」と言う方もいたのですね。えらにイジュの粉が掛かって魚が呼吸できなくなるというような物理的な原因なのか、それともイジュとか、キリンソウとか、ツバキのような植物に含まれる何らかの成分が魚にとってあまりよくないもので、それで魚が浮いてきちゃうのかな、どっちなのだろう、というのが気になりました。知り合いの生物の先生が論文を探してくれたようなのですが、実はあまりこういう、どうして浮いてくるのかのような、この植物の成分はいったい何かというような実験や研究はされていないようで、よく分かりませんでした。何ですかね。何か不思議ですよ。

あと、もう1つまた違う多様性の在り方を見るのに、ユウナという植物を見てみたいと思います。これは久米島紬を染めるときに利用するものですよね。幹を炭にして久米島紬の染料として用います。この写真がユウナの染料で染めたものです。

ユウナで染色することを「グズミ」と言います。また、ユウナにも、いろいろな部位をいろいろなことに利用したよという話を私は伺っています。例えば、ユウナの葉は緑肥に使ったとか、この葉の毛、「ハーヌ キー（葉の毛）」も、久米島紬では繭から糸口を探すのに利用したということです。ユウナの葉の裏は繊毛がびっしり生えているのですよね。これで繭をなでると糸口がそこにくっついてきて、こう伸ばして繭を紡ぐ。今日、私は久米島紬のユイマール会館の方に行ってきたのですが、ビデオでユウナの葉を使って糸口を探している映像があったので、それを見て、あ、本当だ、ユウナを使っていると思って、ちょっとうれしかったです。ほかにもユウナの木を皮を、馬のムゲー（おもがい）を作るときに使ったという話もありました。

ここまでは久米島の話ですけど、私がちょっと皆さんにおたずねしたいのは、沖縄のほかの地域ではこの葉をトイレットペーパー代わりにして用いたよという話があったのです。那覇、うちのおじいちゃん、おばあちゃんとかはそんな感じだったのですよね。そのことについては、私は、表と裏のどっちを使うのだろうと気になったことがあって、琉大の民俗の先生に飲み会のときに聞いてみたことがあるのですよ。先生、これ、表と裏、どっちを使うのですか？毛が生えている方ですか？生えてない方ですか？と聞いたことがあって、そうしたら先生に、當山さん、自分で試してみなさいと言われたのですよ（笑）。私の家の周りにユウナがなかったので、探して使ってみました。私は裏かなと思ったのですが、皆さん、どっちを使用したのか教えてください。

じゃあ、トイレットペーパー代わりにユウナの葉は使ったんですね。そうなんですね。やっぱりユウナの木は必ずおうちにあるんですね。あとは旧盆のときにユウナの葉を仏壇に供えたという話とか、花も使って遊んだりするという話も聞いています。旧盆のときに仏壇に供える話は聞いたことはないですか？そういえば、旧盆のときに何を供えたかということなのですが、今はリンゴとか、バナナとか、パイナップルを置いているのですけれど、よく考えたら、昔はそんなも

のはありませんよね。昔はアダンとか植物を供えていたんだよと聞いて、ああ、それもそうか、昔はパイナップルがあるはずがないと私はやっと気づいたのですけれど。

集落ごとに供えるものとか、何をどうやって供えたかは家々でもすごく違いがあつて、しかも何を供えていたかというのを調べようとしたときに、地域の方達にとっては当たり前のことすぎて、意外とどの本にも書かれていないのですよ。若い人はこういうことはわからないのですけれど。知りたいけど分からないという状況ですね。こういう皆さんにとって当たり前のことも私たちにはわからない、すごく大切なことだと思うので、ぜひ教えていただきたいです。

ユウナもとても身近な植物の1つです。必ず家に生えているような植物です。ユウナという1つの植物を取り上げても、利用の仕方がたくさんあるということが分かります。葉の繊毛、皮、幹、花など、あらゆる部位を利用しています。その利用目的も、染料とか、馬具とか、日常用品、遊び、緑肥、行事など、幅広いものなのではないかと思いました。このようなユウナという1つのものを取り上げて、いろいろな側面や要素、部分をさまざまなことに利用することは、多様性の世界のあらわれであると言えるのではないかと思います。さっきはササを取り上げて、広い範囲で見たらそれぞれ違いがあるという多様性でしたが、こっちはユウナというもの1つの中にいろいろな使い方という多様性があるという、さっきとは、ちょっと違う多様性ですね。

ここからまとめです。この久米島紬の工程で用いられた用具、それから植物や動物は、そのすべてが久米島紬のみに使用されているわけではないことを今までみてきました。生活に身近なものを使用すること。生活の一部としての久米島紬の存在がみえてきました。

久米島の紬には、貢納布制度という過酷な時代や戦争などを乗り越えて、産業として発展させた経緯があるかと思えます。ムシグラー、ミスガーミ、ユウナのように、生活の身近にあるものを利用してきた久米島紬には久米島の人々の暮らしが染め上げられ、織り上げられています。それが今日まで受け継がれてきたということです。それと同じように、地域の言葉、すなわち方言とは、その土地の人々の生活のありさまが、長い年月をかけて焼き付けられたものであるといえます。

久米島の方言を含めて琉球諸語のすべてが、書き言葉ではなく話し言葉であるという問題点があります。文字伝達ではなく、口承による知識の伝達のシステム。文字は残るものですが、言葉は発した瞬間に消えてしまうものです。特に今、お話したような植物や動物、民具をどのように利用したかという知識は、それを知っているおじいちゃんおばあちゃんが亡くなったときに一緒になくなってしまうものです。私たちが後で訪ねていっても、話に聞いたことはあるけれど、もう誰も知らないよというふうになってしまいます。現にそのようなことを調査に行つて言われることは多いのです。地域によって、あるいは地域ごとに、幅広い地域で、地域自体に多様な伝統言語と伝統知の記録や保存は緊急の課題であると考えます。

今は記録と保存の話でしたけど、継承にまつわる問題もちよつと考えてみます。今私は多様性という言葉は何度も使ったのですけれど、このような多様である琉球諸語や文化の在り方というもの、地域の子供たちが、「みんな違っているけど、いいことなんだよ」というような多様性を理解し互いを尊重し合うことを学んでいくために、久米島や沖縄はとてもいい場所、学んでいくのにとてもいい場所であると思えます。たくさんある、みんな違う、でもそれが面白くて素敵なことなんだよという大切なことを、久米島方言を学んでいくなかで子供たちに教えていくことができるのではないかと思います。

私は今回久米島に来るときに飛行機を利用したのですけれど、飛行機で、今日は私たちの飛行機を利用してありがとうございました、ニフェーデービタンというような首里那覇方言をアナウ

ンスしていました。あれはとても面白いなと思いました。とてもいい取り組みだなと思います。

でも、今回、私が久米島を調査して思ったことは、さっきの穰先生の話でありましたように、久米島の中でもこんなに違いがたくさんあって、沖縄の中でも違いがたくさんあるのに、それを「ウチナーグチ」、「シマクトゥバ」という言葉でくくって、結果として、首里那覇の誰が話しているのか見えてこないような言葉を推奨していくような取り組みは、特に久米島の方言事情をふまえたときに違和感がみえてきたのですが、慎重にならなければいけないかなと思いました。

飛行機のアナウンスの取り組みはすごく面白いと思うのですが、久米島路線ですから、例えば、今日は嘉手苺の方言でとか、今日は山城の方言でアナウンスしますとか、日ごとに変えてやったらすごく面白いし、みんなも、えっ、何、今日は山城の方言ってどういうこと？という感じで、観光客の人もびっくりしておもしろいかなと思いました。今行われているような、話者の顔もよくみえてこないウチナーグチを、第2の標準語であるかのように周辺の地域の方や生徒とか子供たちに押し付けるというか、そのようなことを無自覚にやっていくのはちょっと考えなければいけない問題なのではないかと、私はこの久米島の調査を通じて話者の皆様から教えられ、考えさせられるきっかけになりました。今後の課題にしていきたいと思います。

私の発表は以上です。ありがとうございました。(拍手)

3 「この島の宝」 吉田怜愛

(司会：木部) では、ディスカッションに入る前に、実は飛び入りがありました。明日、大分県でスピーチ大会があるんだそうですが、そこで久米島高校2年生の吉田怜愛さんが「この島の宝」というスピーチをなさるので、今日ここでお話をさせていただくことになりました。怜愛さん、よろしくをお願いします。

(吉田) このような大きな場ですごく緊張しているんですけど、発表させていただけるということで、本当にありがとうございます。

<歌う>

(吉田) 「イチャタルヤチョーデーグワー、イチャタルヤドゥシーグワー(行逢たるや兄弟小、行逢たるや友小)」。

「一度会えば皆兄弟、何の隔てがあろうか。語り合おうではないか」。この曲は沖縄の伝統的な民謡「兄弟小節(チョーデーグワブシ)」です。このように、民謡には教訓や人の情け、生活の知恵が盛り込まれていたもので、多くのウチナンチュから愛されていました。いわば民謡は沖縄の心だったのです。民謡は子守歌にも、畑仕事のお供にも、家事の合間に一息入れるときも、子供を戒めるためにも大活躍だったといえます。

私はよく祖母に面倒を見てもらいましたが、瓦屋根のその家では、いつもラジオから民謡が流れていたのを覚えています。それをBGMに、おばあがしまくとうばで昔語りをして寝かしつけてくれる午後のひとときが大好きでした。その音色はいつしか私の体にも染み付いていました。

ところが現在、日常的に民謡を耳にすることはほとんどありません。ラジオから民謡が流れることは少なくなり、家でしまくとうばが交わされることはめったになくなりました。沖縄の心だった民謡は、長い年月を経て消え去りつつあるのです。

私は地域の三線教室で民謡を習っています。そこで気付いたのが、中高生で伝統文化を習っていることが恥ずかしいと考える人が多いということです。実際、習い始めたころは私もそう思っていました。民謡ははやりの曲と違って、テンポは遅いし、何か古くさくてかっこ悪いというのが当初の印象でした。

しかし練習していくにつれ、民謡のよさが分かってきました。表面的なものではなく、情に訴え掛ける歌詞の深さや温かみ、心に安らぎや力を与えるメロディー。私たちが忙しい現代を過ごしていく中で忘れていったものが、歌からにじみ出ていました。だからこそ昔を知る人は民謡を忘れられないのでしょう。

最近、老人ホームへ慰問公演に行きました。そこにいるおじい、おばあちは、ほとんどが車いすで、中にはぼーっと虚空を見つめているような人もいました。しかし私たちが三線を弾き民謡を歌うと、しっかりと焦点を合わせて歌に聴き入ってくれました。カチャーシーでは両手を上に上げてリズムに乗ってくれ、車いすのおじいさんが立ち上がって、よたよたと歩きながら一緒に踊ることもありました。歩けないはずなのにとスタッフの方が驚いていたほどです。昔から生活の一部だった民謡は、彼らの活力となっていたのです。地元で根付く文化の力を感じました。

中学3年生の夏、私はアメリカへホームステイに行きました。そこで聞こえる会話はすべて英語。方言どころか日本語にすら触れることのできない毎日。私は少しホームシックにかかっていました。

そんなとき、ふと思い出して沖縄から持ってきた三線を鳴らしてみました。アイ、シー、コー、と鳴ったときの、あの涙の出るようなうれしさは忘れられません。弾きながら歌っていると、ファミリーが集まってきました。これは何、と尋ねる彼らに三線について説明すると、ワオ、とすごく感心していたことを覚えています。

アメリカは多民族国家故に地域独自の文化というものが少ないといえます。彼らがあまりにも褒めるので、思わず、そんなすごいものでもないよと謙遜すると、逆に、何を言っているのとしかられました。自分の故郷にあなたが誇りを持たないと、誰が文化を守ってくれるの、という言葉は私の胸に染みしました。そこには民謡が古くさくてかっこ悪いという考えはまったく感じられませんでした。周りに流されていつの間にかつくられていた民謡への偏見が消え去っていった瞬間でした。

民謡はウチナーンチュの誇り。沖縄の歴史の結晶。そして文化はこの島の宝なのです。現在、沖縄で民謡が消え去りつつあるのと同じように、しまくとぅばの話者が少ないことが危惧されています。確かに私の年代でしまくとぅばを流ちょうに話せる人はあまりいません。このままではしまくとぅばが消えてしまうのも時間の問題。

私は、その打開策となり得るのが民謡だと考えます。沖縄の民謡はすべてしまくとぅばなので、民謡を歌えば自然にしまくとぅばを話すことになるからです。そうすればしまくとぅばはずっと生き続けるでしょう。

地元の文化の大切さは、故郷を離れてみないと分からないものなのかもしれません。しかし、ようやく気付いたときに、もう廃れてしまっていては意味がないのです。私は後悔しないためにも民謡を歌い続けます。伝え続けます。まずは沖縄に、日本に、そして世界まで。この広い世界に1つ、沖縄という小さな地域にしかない尊い文化、民謡。多くの人にその素晴らしさ、大切さを知ってほしいです。いつかこの沖縄に民謡の歌声があふれるその日を願って。ありがとうございました。(拍手)

(木部) はい。素晴らしい。どうもありがとうございました。明日、頑張ってくださいね。

(吉田) ありがとうございます。(拍手)

(木部) はい。素晴らしかったです。今日、今の怜愛さんのスピーチ、ぜひお孫さんの世代に、やっぱり方言で語り掛けてほしいよね。ですから、ぜひ年配の方が高校生に、あるいは小学生にもっと方言で語り掛けていただき、島言葉で語り掛けていただきたいと本当に思いました。どうもありがとうございました。